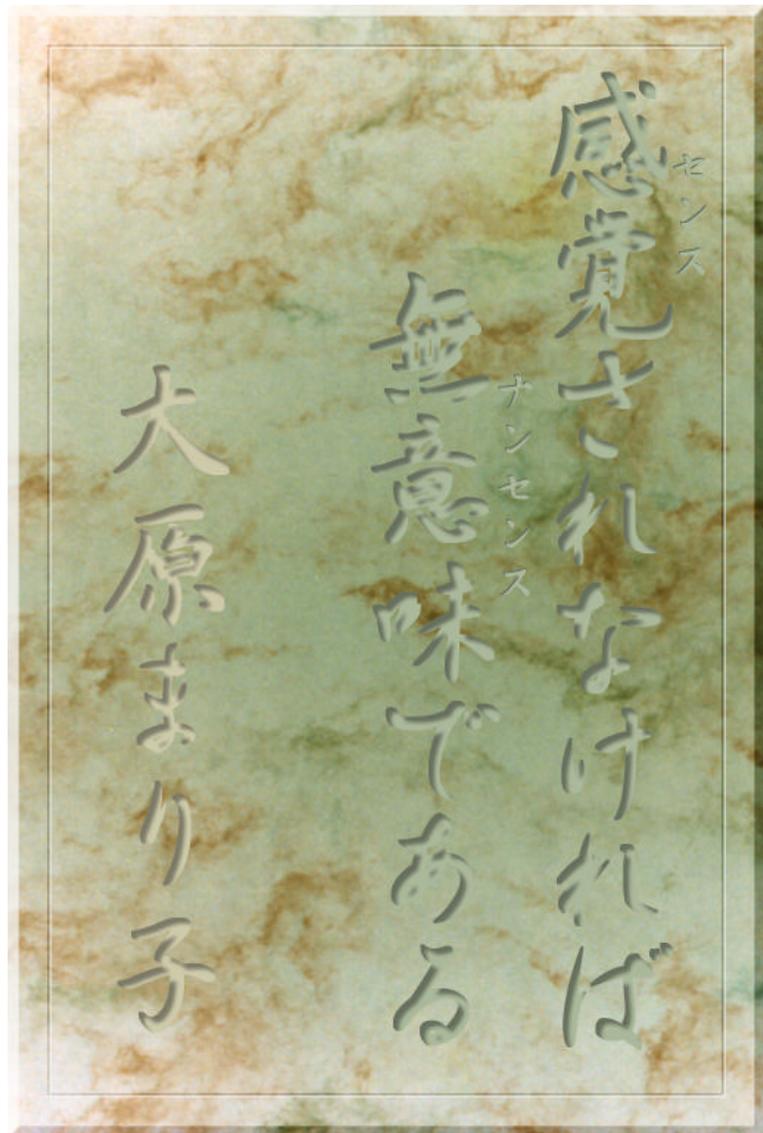


感覚センスされなければ無意味ナンセンスで  
ある

大原まり子



暖かくなつてから、しょっちゅう草むしりをしている。しょっちゅうむしつていないと、アツという間にボウボウになつてしまうからだ。わが家のような狭い庭でも、雑草が生い茂ると、けっこうむさ苦しい。

一 昨年の夏は<sup>三</sup>雑草というものがほうっておけばどのくらいの背丈になるかという実験をしたために、近隣の住人から嫌みを言われる羽目になつた。

草を引いていると、いろんな虫たちに出会う。こっちはあまり会いたくないのだが、草の葉の陰にいた虫たちがワラワラとわき出してくる。

生まれたばかりの体長一センチほどの<sup>カマキリ</sup>蟷螂。姿形はオトナのカマキリとまったく相似形なのに、全体的に透きとおつてまるで薄緑のガラス細工のようだ。それがカマをあげて威嚇したりするから、可愛らしい。まるで妖<sup>ティンカー・ベル</sup>精に出会つたかのような

不思議な気分になる。

さて、落ち葉などをのぞくとゴロゴロ出てくるのが、まるむじ、うじやうじやたくさん足があつて、全身節だらけで、危険と判断するとクルリと身を丸める黒い虫、便所虫などと言われるアシだ。

と思つていたら蜂が飛んできた。

ほぼ毎年、<sup>わ</sup>が家には蜂たちが巣作りをしにやってくる。門扉のところだが、この他お気に入りのようなようだ。どうもフェロモンが残っているらしく、毎度まったく同じ所へ巣作りしようと集まってくる。ハツと気づくと例の六角形の集合した巣ができかけていて、なかなか不気味である。

発見するたびに、夫が真冬のような格好をして汗だくになりながら巣を落とし、殺虫剤をふりかけて、追い払うことになっている。

ところで、わたしは一昨年、ある虫たちに襲われた。

それは　ダニである。

わたしは掃除機が大嫌いだったので、部屋は埃と菓子クズにまみれ、湿気もあって、ついにダニの発生とあいなったのである。なんかむずがゆいなあと思っていたら、足を咬まれ、腹を咬まれ、ダニだ！　ということになり、恥ずかしいやら驚くやら、大パニックになった。

さあ、それからが大変。掃除機をかけ、布団も服もクリーニングに出し、バルサンをたき、ついにベッドまで捨ててしまった。なのに、むずがゆさがおさまらないのである。部屋にいるときはもちろん、電車に乗っても背中がむずむずする。

夫は「妄想だ」と言うのだが、言われたところで治るものではない。「ダニ妄想」という病気が存在するのも知っていたが、なにせ本人がダニと信じているものだから、ダニでしかないの

であった。寝ても醒めてもダニが全身を這いまわっている光景が目に見えぬ。

なぜなら、ダニは目に見えない。目には見えないからこそ、いると思えばどこにでも遍在することになる。じっさい、人間が快適に過ごせる場所でダニのいないところなど存在しないのだそう。

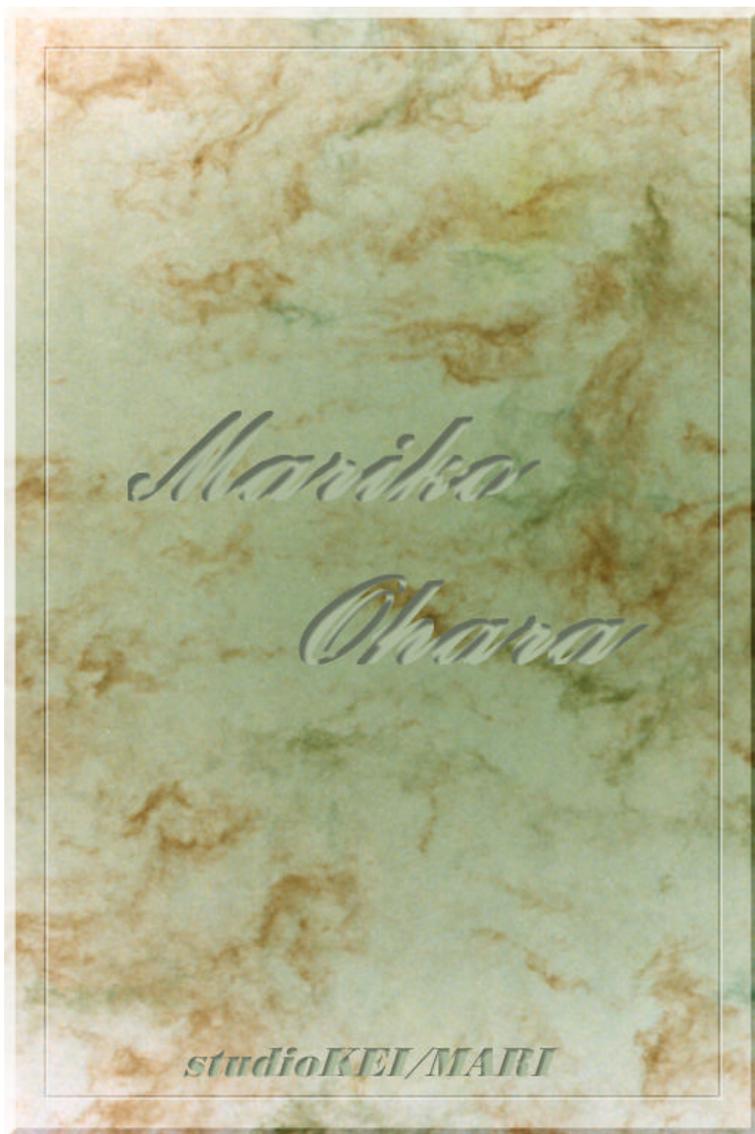
その昔、恐竜が滅亡への長い道のりを歩んでいた頃、哺乳類と虫たちは植物と共生することによって、種として大成功した。哺乳類は果実や木の実をもらうかわりに植物や木々のタネを遠くへ運び、虫たちは花粉を足につけて運ぶことで花から蜜をもらった。

地球は、一見、人類が覇権を握っているかのように見えるけれども、種の多様性、数から言っても、実は虫の惑星なのだそう。

わたしたちの感覚センスが検知しないものは無意味ナンセンスでしかない。ものすごくたくさんいるのに、虫たちは定かに目には見えないのである。

感覚センスにはなかなかひっかからないが、息が詰まるほど膨大に存在するかもしれないもの。無意味ナンセンスが突然、感覚センスにひっかかって不気味な存在として立ち現れる事態事態。虫は、そのようなもののメタファーとして、今のわたしには感じられるようである。

( 終わり )



=====  
センス  
感覚されなければ無意味で  
ナンセンス  
ある

ユリイカ1995年9月号掲載

=====  
著者・著作権者：大原まり子  
制作：スタジオ KEI/MARI

ohara.mariko@nifty.ne.jp  
<http://www.bekkoame.ne.jp/~ohara/welcome.htm>

本文書の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載  
をすることは、著作権法上認められている場合を除き、  
禁じられています。